

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 大田 英昭

本論文「明治日本における社会民主主義の形成——片山潜とその時代」は、幕末から明治末期まで、農民出身であった片山潜（1859-1933）が、どんな体験を経てキリスト者となり社会民主主義を求めて働いたか、そこで担った労働・組合・都市社会・国家といった問題は何だったかを、当の人物とその時代に具体的に踏み込んで思想史的に探究した論文である。従来の片山論を踏まえ更に乗り越えるべく、片山が懐いた時処と状況により深く入り込み、社会民主主義を希求する片山の活動形態を、出来る限り遡及し続けている。

内容に関わる要点をいくつか捉える。「第1部 片山潜の思想形成」では、誕生からアメリカ留学までの片山の人生を辿る。片山は生家と共に幕末明治初期の農村の一揆・騒動を体験し、対応する曾祖父への強い倫理意識をもちつつも、さらに文明に向けての学問と立身に向かった（第1章）。彼は上京するが挫折し漢学を学ぶなかで、「真の学問」を求めて貧者ながらも渡米する。そこでの援助・学問を機に「国体」を超え「全人類を同胞とする」「地球の生命」としてのキリスト教を、進歩・社会運動・社会福音観と共に抱く（第2章）。そこには、観念的ではない倫理的社会的な救済があり、実際、片山は、大学や神学校において労働や都市などの「社会改革」を行う社会学を学びまた実地調査を行い、また有機体論・進化論的社会観を持った。これらが、帰国後の片山の活動を準備したのである（第3章）。

「第2部 明治日本と社会問題」では、片山自身の体験から少し離れ、日清戦争以前・以後の日本における社会論の形態と労働の在り方を、大きく把握する。日清戦争以前に、まず先立って社会問題論が形成され始める。それは社会政策学、国粹的社会論、資本家労働者鎮護論、労働者組織論、社会的キリスト教など略五つの思潮として発生したといえ、これらは戦後の社会・労働問題の予防策でもあった（第4章）。日清戦争後になると実際の現実として経済発展とともに貧富隔絶があらわれ、これへの対応が課題となった。これに対して、以前の伝統とは異なった自主的連帯の組合を組成しようとする運動が、例えば鉄工組合として発生したことが可能性として指摘できる（第5章）。

「第3部 片山潜と社会問題」では、日清戦争後、明かに出現した日本の「社会問題」に対して、帰国後の片山がどう取り組んだかをとらえる。片山は、最初、社会改良事業を、セツルメントとして行ったが、直ぐ労働問題に向かい、そこから伝統的な組合をさらに組織化し、互助・教育・商議など協同組合を作る労働運動を行う。その運動は、当初、政治との関係は控えめであったが、憲政党内閣成立後（1898）、実際に政治に関与し始め、立憲政治下で「自治独立」する合法的な共働組合の全国化また国際化（人類・同胞）の方向を打ち出す。だが、「国家」への期待を懐くものの、治安警察法（1900）が強く相俟って、実際に行った鉄工の待遇改善の運動は結局敗北に終わる（第

6章)。片山はまた、日清戦争前後の東京の変容における紛糾と汚染・環境悪化に対して、英国での認識を背景に、人々が集まるよりよき場所としての「都市」論を表わす。市民の生活・交通・瓦斯水道・土木等の形成を方向づける「都市社会主義」を論じ、また市会による「市民自治」、また「都市経営」を提言する（第7章）。

こうした片山の論理は、そもそも彼における社会主義思想の形成に結び付いていた。片山は、1898-99年頃、社会改良を論ずる際には、社会主義を福音として強調し、そこには「神の国」信仰に基づく目的としての進化論があった。ただ、その「楽観」は、1900年始めの治安警察法以後、打ち壊され、片山は、資本家制度への「革命」の必要を唱えるようになる。片山は、1901年5月、「社会民主党」の結成に与る。この党は即座に禁止されるが、片山はさらに『我社会主義』（1903）を記す。本著での片山の論理は、「福音」を語り「進化」をもった、労働問題を根源としての「社会的革命」論である。しかも片山は、それが大日本帝国憲法に抵触するものではない、と考えていた（第8章）。

「第4部 社会主義・民主主義と明治国家」は、片山の運動と思想とを、「社会民主党」や周辺の他の思想家たちと対比した明治国家観において、いわば全体的に位置づけている。そもそも片山の労働や社会主義の運動は、「普通選挙運動」と共にあり、これを支えまた目指す取り組みであった。そこにまさに「労働党」の考え方があったのである。これはまた、明治憲法の枠内での自由平等の民主主義の主張であり、木下尚江の、「帝国」の破壊さえ宣言するものとは違っている（第9章）。社会民主主義者たちの内外の差異は、日露戦争(1904-05)後、日比谷焼打事件またロシア第一革命(1905)においてより現れてくる。ただ、片山潜は1904-1906年、多くアメリカで活動しており思想内容の変容はあまり見えない。論文では、堺利彦(1871-1933)、木下尚江(1869-1937)、山路愛山(1865-1917)、北一輝(1883-1937)、幸徳秋水(1871-1911)に踏み込み、堺の民衆への関与や戦略的発想の無さ、木下の政治への断念、幸徳の議会否定と直接行動論などをとらえる。一端合法的に成立した「日本社会党」(1906-07)では、議会政治を選ぶ田添鉄二(1875-1908)が、片山に近い継承者・活動者だった。ただ党は議会政治より直接行動を選び、結社禁止となる（第10章）。

では、片山自身の論理・活動はどうか。それが「明治末期の社会民主主義の行方—片山潜における「革命」と「改良」の隘路」（第11章）である。このあたりを調べる際、従来、その社会民主主義からの流れが「革命」運動だったか、資本主義変革を視野外においた「改良」運動だったのかが問いの構造になる傾向があった。が、著者は、この二項対立を超えるべく、「片山たち議会政策派」について、隅谷三喜男による論を引きつつ、理念としての「革命」と政策としての「改良」が並存する形態としての「社会民主主義」の運動だとし、それを歴史的に詳述しようとする。

本章では、片山が、1900年に「労働運動を政治運動に編成替えすることを優先した」ことの「失敗」を、彼自身「無上の教訓」としていることを押さえ、1907年頃からの、労働自身から出発する活動を見い出す(同第1節)。また「憲法治下における社会主義」の実行を見る。ゼネスト・ストライキもそこにあり(第2節)、それはまた無政府主義とはまったく違う合法的な社会民主主義であり、かつ国際社会主義運動(第二インターナショナル)の「万国社会党」に与ることでもあった。が、結局は、直接行動派の

みならずこの議会政策派も順次強く弾圧される（第3節）。「大逆事件」だけでなく、議会政策を説く片山も、その後逮捕・服役し、やがて米国へ出航する（第4節）。

終章では、全体を改めて振り返った後、片山の社会民主主義が、安部・堺、さらに大正デモクラシーに繋がること、キリスト教については、彼において信仰が冷却したより純化したと見るべきではないか、と指摘する。

片山潜は、社会民主党（1901）における最も高齢の創始者でまた社会民主主義の重要な論者だが、従来、彼の活動は十分とらえられるより敬遠される傾向すらあった。これは、片山が最終的にソ連で晩年を過ごしており、戦後の社会主義・共産主義からも、片山を敬うにせよ、明治期の行動は必ずしも重要な意味を持たなかったからだろう。初期社会主義研究においても、片山はやはり微妙な位置をもつ。

これに対して、本論文は、明治期 50 余歳までの片山潜の活動を深く辿り、その意味を改めて再構成する。これは近代日本社会民主主義史の空白を埋める作業として、大変高く評価できる。また、当時の社会民主主義の背景として、片山自身について、その少年期から留学期の体験、キリスト教社会思想との関連もよく押さえている。その片山の論理において、神の国、進化論、自立的社会論また都市論の形成があることも、従来あまり見出されなかったものに踏み込んだ仕事である。

片山たちが立ち上げた社会民主主義は、当時のみならず現在でも、政治的関心から消えているようである。本論は、その空白に介入しこれを改めて再考する優れた手立て・方向となるだろう。またその片山において根本的課題として現れる労働観も、いま改めて調べ考えるべきものと言える。

とはいえ問題はさらに残る。片山は「憲法下」の活動を説くが、その在り方は何か。特に、「天皇大権および軍隊の問題」については、触れられてはいるが、更に片山論として調べ位置づけるべき問題だろう。また、1903-07 頃の何度かの渡米はどんな意味を持ったか。片山は最終的に出国後、国際的活動をし、晩年にソ連の人となるが、これらが一体何であったか。そこでの共産主義とかつての社会民主主義とはどんな差同があるのか。これら当該の日本を越えた状態についても、詳細に位置づけるに資料は少ないだろうが、課題が残っている。

片山以外の当時の思想家たちについて、よく触れているが、その評価・位置づけについて、さらに議論がまた叙述が必要だろう。これは結局、当の「社会民主党」が何であったか、「社会民主主義」と言えるものが何か、片山周囲の状態また後の歴史をどう見るか、といった問題になる。そこには日本史における社会運動が、いかに形成され、いかに断絶ないし継承されているか、といった課題が、世界史と共に現れている。

とはいえ、これらはやはり本論の次の課題だといえるだろう。本論文は、従来見落とされる傾向があった明治日本の社会民主主義またキリスト教思想といった重要な活動の可能性を改めてはっきりと見出している。それはおそらく 20 世紀末以後、21 世紀初めにして漸く発生した優れた研究である。時代を遡及することで従来の近代史観を越え、そこに社会民主主義を見出す仕事であり、その問題意識も高く評価したい。本論文は、当該研究分野において画期的な地平を開くものであり、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであると認定する。